

[本当はカワイくない「お菓子と娘」]

日本の音楽学校で教えていたころ、何人かの女生徒がレッスンに持ってきた歌がある。西条八十の詩に橋本国彦が曲をつけた「お菓子と娘」。

お菓子の好きな 巴里娘
二人そろえば いそいそと
角の菓子屋へ ボンジュール

選る間もおそし エクレール
腰もかけずに むしゃむしゃと
食べて口ふく 巴里娘

残るなかばは 手に持って
行くは並木か 公園か
空は五月の みずあさぎ

人が見ようと 笑おうと
小唄まじりに かじり行く
ラマルチーヌの 銅像の
肩で燕の 宙返り

あまりにも“イロツポクナイ”歌いっぷりに、聴講生も含め、皆にふと尋ねてみた。「ええと、この“巴里娘”は、一体いくつくらいと思う？」返ってきた答えは、「多分5歳くらい？」「お菓子を買って食べて歩けるのだから、2、3歳よりは上では？」10歳より上の年齢は誰からも出てこなかった…。啞然とした。

今では国際交流も盛んになって、外国の友人たちも増え、映画や雑誌、それこそインスタグラムなどで“パリジェンヌ”(巴里娘)に触れる機会もずいぶんあるはずなのに、出てくるのはこの答えか！

ちょっと横道にそれるが、ひとつエピソードを紹介したい。ドイツ人を夫に持つ、フランス人の友人がいた。背は高いが、スタイルが抜群というわけではない。特別“美人顔”ではないが、雰囲気の良い女性だ。夫婦がパリからドイツのハイデルベルク郊外に移り、何年目くらいだった

ろうか。夕食後にワインを傾けながら、彼女が不満をぶちまけた。ドイツ男性についてである。

「いったいドイツ人は私を何だと思っているの？ 通りを歩いている、口笛一つ吹きやしない！」

簡単に言うと、ドイツで生活していると、自分が女として認められていない、と感じるのだそうだ。

彼女の夫ともう一人の友人は、説得を試みた。

「気持ちはよくわかるけど、我々“ドイツ人”は、素敵だと思っても女性に口笛を吹いたりしてはいけない、不躰だし、女性をきちんと扱う礼儀ができていない、と教育されているんだ。(だからそう思っても実際にはできない)」不毛の議論だった。彼女は納得しない。

日本では、そもそも道行く見知らぬ女性に、口笛なんか吹くはずもない。もし誰かそんなことをしようものなら、今はセクハラと言われるかも…。でも彼女の故郷では、ナンパでもセクハラでもなんでもなく、“挨拶”のようなもの。「口笛を吹かれる」方も、ただ単に“ニコッ”と受け流して歩き去るだけ。フランス風のエレガントな「存在確認」、とでも言えるだろうか。まあもちろん、ナンパはある。できると思った相手には。イタリアに行くと、“挨拶”をしないのは相手に失礼、くらいの頻度で、ほとんどどんな女性にも口笛が飛ぶ。

「お菓子と娘」の巴里娘。お菓子屋さんに寄って、エクレアを頬ばる屈託のなさから思うに、おそらく13歳から16, 7歳。でも20歳より上ではないのではないかしら。ただし、このティーンエイジャーたち、女性としての自意識はすでに十分に高い。

どんなに笑いこけてお菓子を食べていても、おそらくどこかで何かを“無意識に意識”している。お化粧などの問題ではない。(欧米では、普段はそれこそスツピンの女性が多い。)まなざし、足つき、歩き方、立ち方、座り方、すべて「カワイイ～イ女の子」は目指さない。それを評価する男性もいない。

30歳の誕生日を迎えて、「これからも少しでもカワイクなることを目指したい」と言った日本人のタレントの記事を見た。

かわいらしさのアピールが存在し、評価される日本に比べ、フランス人は多分、見た目のカワイイより、カッコイイ女性になりたいのではないかしら？！

そこでもう一つ、日本に長いこと住んでいた、お洒落なオーストリア人の

男友だちの言葉を思い出す。

「日本の女の子たちは、みんな本当にきれいにお化粧して、服装もセンスはいいし、靴も髪もとても気を遣っているのに、なんで電車の中であんなふうに(カッコワルク)座るの？ それに、ハイヒールだと、何だか“パンツにおもらし”しているみたいに歩く。」ひどい言い方…。でも言葉に出さずともそんな風に見ている人たちがいる。

見る人が男性である必要はない。ほんのちょっとした意識の持ち方の違いだけで、“オーラ”は変わるという。ポジティブに変わる可能性がある。

「私はファッションモデル！」と想像しながら歩くだけでも違うはずだ。

ウィーンのピラティスのトレーナーからは、セッションの際、「エクササイズのためにマシーンに上り下りするときにも、毎回できるだけ優雅に動くことを意識して！」とまで言われた。それだけでも体の線は変わるのですって。やってみる価値はありそうだ、フムフム！